



ハタラクヒト *ペディア17

< 水野忠男 氏 >

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はNLPやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。

行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

第17回は、T.M.Aコンサルティング代表の水野忠男さんです。

水野忠男さん



1948・4・21生まれ

会社T.M.Aコンサルティング代表者
所在地豊明市

当社は製造企業を主に、生産に関する総合のマネージメントのアドバイスを行っております。（生産管理、品質管理、人材育成など現場に密着した指導）各企業に出向き、工場診断、研修、改善提案など一貫した、フォローが特徴です。現在は”刈谷モノづくり大学”の教授をさせて頂いています。活動拠点は地元刈谷、上海、北京を中心にまわっています。

趣味多趣味です。

旅行、写真、料理、熱帯魚飼育、オフロードドライブなど

休日は海外出張地（主に中国）であれば観光です。

好きな本：モノづくりの雑誌、マガジン

好きな音楽： Engelbert Humperdinck の歌

連絡先： 0562-97-0490

メール： mizuno@t-advice.com

H P : www.t-advice.com

◆無手勝流では失敗する

水野忠男さん（以下敬称略、水野）： 40数年会社におりまして、2年前に定年退職しまして。

田中永子（以下、田中）： そうなんですか。お若いですね。

水野： え？ いえいえ、65歳ですよ（笑）

田中： お若いです。

水野： 会社生活のほとんどは、ものづくりの工場の方で、『アルファード』とか『ハイエース』の組立部長もやってまして。三重県で、単身赴任でね。15年間ぐらい。

田中： へえ。

水野： それから本社へ戻りまして、約6年間ぐらい「海外の子会社の指導にあたってくれ」ということで、グローバルセンターの部長を務めさせてもらった時に。仕事が全部海外なんですよ（笑）

田中： ふふふ。大変ですね。

水野： それで、私の部下は約400名ぐらい。私も直接行くし、部下も行かしたんですけど、そうした時に、なかなか会社で教えてくれない話がいっぱいありましてね（笑）

田中： どんな話ですか？

水野： その話の中でね、一番おもしろいなっていうのを講演会でも話すんですが、テーマが「無手勝流では失敗する」という。

田中： 成功するっていうか、流れがきちんと出来るのって、必ずセオリーってありますね。

水野： あります。400人の中で、成功した人と、失敗する人のパターンが2つあるわけ。その話がおもしろいなって思って。海外、東南アジア特にいろいろ周ってまして、タイ、マレーシアとか。80回ほど。

田中： 80回！ 凄いですね。パスポートのスタンプ押し切れませんね。

水野： そう（笑） 今日（パスポート）持ってきたよ。もう増刷して、40頁増やしてくれるわけ。

田中： ほんとですか？

水野： パスポートはね、いっぱいになると増やしてくれる。それもいっばいで、今セントレアで、マークされてるわけ。

田中： あまりにも頻繁過ぎるぞ、みたいな？

水野： 回数が多いから。

田中： ほんと分厚い。

水野： これね、おもしろいことにセロテープで留めてあるんだわ。

田中： これは、むこうが留めてくれたんですか？

水野： 名古屋のパスポート発行してるところで。40頁をセロテープで（笑） 大丈夫かしらって思うよね。

田中： ベリって、破られそう（笑）

水野： それでみんなに見つかるわけ。「なんだこれ、偽物じゃないか？」って。

田中： 確かに怪しい（笑） けどお、偽物だったら、こんなちゃっちゃいこと、しないですよ、逆に。

水野： そうそう。で、こんなにスタンプ押さないからね。ていうことで、今でも荷物は注意しないといかん。帰ってくる服装も。

田中： 注意っていうのは、具体的には。

水野： 運び屋と間違われるもんだから。

田中： ぶ。

水野： 必ずジャケット着て帰る。ラフな格好はダメ。回数が多いとね。

田中： へええ。

水野： そういうことありましてねえ。そういう話の中、外国でその能力を発揮できるかどうかは、事前の準備が出来ておる人。その人が成功する。それで会社の中でね、エリートクラスっているでしょ？ そう言う人はすごく弁がたって、知識もあって自分がしゃべりたいわけ。

田中： ええ。

水野： だけど現場の事はあんまり知らない。もうひとつは、あまりプレゼン能力はないけども、しっかり現場で人を教えるという事に長けている人。成功するのは後者の方なんですよ。

田中： はい。

水野： それで前者のね、いわゆるエリートクラスは、自分の力を過信して事前の準備をしない。向こうに行ってもなんとかなるだろうと。

田中： そういうことなんですネ。

水野： だから、言葉もあんまり勉強しない。向こうでもしゃべれると錯覚するんだね。

田中： ふふふ。

水野： 出来ない人は、逆に勉強してくわけ。そこが大きく違うところで。約400人見とって、現地で上手く指導してくれて、我々が思うような成果を上げてくれるっていう人は、後者のどちらかという、会社であんまり評価が良くない人。

田中： 言い換えると、テストの点数は良くないけど、体育祭とかで頑張るような感じの人の方が、割に力を発揮出来るという感じですか？

水野： そうそうそう。現場に行かせると違う。こういう話の方がおもしろいでしょ（笑）

田中： はい（笑） ぜひ続けてください。

水野： 例えば、海外行った時に、まず最初はね、どういう人が認められるかって話なんだけ

ども。

田中： ええ。

水野： 日本の企業で海外に行く会社は、朝ラジオ体操やるんですよ。例えば、田中さん、みんなの前でラジオ体操の第1出来ますか？ いきなり来て。今日来て。ラジオ体操の音楽鳴りましたと。

田中： きっと出来ない。ラジオ体操、忘れてますね。

水野： 来た人は、そこで出来ないと、だめだと思われるんですよ。

田中： そうかあ。

水野： 会社に入ると、会社の体操があるんだわ。トヨタ車体なんかも朝に体操あるんだけど、それを何十年もやっていると。でも、ラジオ体操なんか忘れちゃつとるわけ。いきなり現地で100人ぐらいの前でね、「今から、ラジオ体操第1」って言ったってね（笑）

田中： ねえ（笑）

水野： そういうふうに、舐めてかかると最初から認められない。海外の人っていうのは、どれだけ頭がいいか、悪いなんてわかんないわけ。だから、みんなの前で「あっ、さすがだね」って言われるようなことが出来ないとだめ。

田中： パフォーマンスが上手くないと。プレゼンも。

水野： そう。プレゼンも、例えば話すことは、向こうも知識としてはかなりあるわけ。それよりも現場で、溶接のひとつもやって見せてあげる。電気の配線とかを見せてあげる。

田中： うん。

水野： すると、「凄い人だねー」って。

田中： あー。「はあー、凄い」って思ってもらうことが大事なんですね。

水野： そうそうそう。海外でこれからね、刈谷からでも行かれるだとか、あるいはもう既に出ている会社でもね。出張しなさいと言われて、ほとんどの人が現地で受け入れられないのは、ま

ず最初の第一歩が間違えてるから。

田中： 結構シビアなんですね。

水野： シビア。

田中： 友人が、やはり今からだいぶ前に海外に市場開拓に行った時、「もう、死ぬ思いだった」って言ってて。風習や話の持って行き方も違うから。

水野： そうそう。

田中： きつかったのが、信頼関係が出来るまでがすごい大変だったって。

水野： その信頼を得るのに、この人はできるって思わせなきゃいけないから。いかに準備をするかってことなんですよ。例えば、我々が現地で立ち上げるのに、「向こうにもホームセンターみたいなものがあるだろう」、「現地で買えばいいや」って何にも持って行かないわけ。ところが、何にもない。

田中： そうなんですね。

水野： だから、最初からないものとして考える。後、「棚を作ってくれ」と言われたら、木を伐ったりね、組んだりして、その場で出来なきゃダメなの。

田中： そこからですか。

水野： そこから。

田中： 大工仕事も。オールマイティに出来ないとかダメなんですね。

水野： そうそう。きれいに作らなくてもいいからね。要は、その人が「私たちのために、あるものを上手く工夫して考えてくれる」というような……そこの信頼なんです。

田中： それが積み重なって、仕事に繋がって行くんですか。

水野： そうそうそう！ だからきれいに図面描いたってダメなの（笑）

田中： 総合力を求められるんですね。

水野： そうそう。いわゆる機転が利くという。これがないとダメではなくて、「あるもので何とかやりましょう」と。もし書くものがなかったら、石を拾ってコンクリートの上を書くとかね。

田中： それでもいいから。その時に求められてることを、どういう形でもいいから。

水野： そう。すぐやる。

田中： すぐ、なんですね。凄いなあ。

水野： それがね、最初は私もね、わからなかったの。最初の10回行っても、あっちは私がどういう仕事してるのかわからないから、自分が仕事してる写真を持って行ったんだけど。写真ではわかんないわけね。

田中： うん。

水野： 例えば、「レイアウトを変えなさい」と言っても、向こうの人はジッと見とるだけ。

田中： お手本見せろってことですか？

水野： そうそう。

田中： 10回ぐらい行かれて、それを手探りでそれをつかまれたと。

水野： そうそうそう。始めはねえ、無手勝流で行ったわけよ。「海外なんかたいしたことないわー」って。

田中： ふふふ。

水野： 最初の1～2回は挨拶程度。3～4回目は現場を見てトップにいろいろ話をする。下には全然繋がらない。だけど実際は現場を変えてかなきゃいけない。工場を立ち上げて行かないといかん。一番下の人に動いてもらうために、飲み会には何回も行った。つぶれるぐらいまで飲んだんだけど、そしたら「水野さんは酒だけ強い」と。

田中： あはははは。そっちのパフォーマンスはよかったんですね（笑）

水野： あははは。ま、「これじゃいかん」と思って（笑） 彼らが「これ教えて下さい」って言ってきた時に「後から日本から写真を送るね」とか、「後から書類送るね」ってことは、やとっちゃいかん。その場ですぐに教えなきゃいかんっていうことに気がついた。

田中： うん。

水野： そうなってくると、次から行く時にいろんな現場をシミュレーションするようになる。行程とか、現場に行って何をしゃべるかも、通訳がないことも考えんといかん。例えば、東南アジアはほとんど英語で会話できるんだけどね、こっちもそんなにペラペラしゃべれるわけじゃない。通訳が常にいてくれたから良かったんだけども、いないことも考えて。

田中： ええ。

水野： 毎日ホテルでね、話すことを順番に紙に書いて、それを英語に翻訳して。でも、それを電子辞書でやろうとしたら、あかんわけ。

田中： どうしてですか？

水野： 現地では、「この人はカンペみたいに作った」という努力を観てるから。

田中： へえ。一挙手一投足を観られてる感じ。

水野： 観てる、観てる。「この人は私たちのために、言葉まで全部書いて」というのを。

田中： うん。

水野： その言葉もね、すぐに出てこないわけよ、どうだったかなとか。でもそれはいいの。

田中： それは待ってくれるんですね。

水野： いいこと教えてくれるのを、待っとるわけ。電子辞書みたいな簡単なことよりも労力を観てる。だから私も行く前に、100円ショップで単語帳みたいなのをいっぱい買って、場面によって使い分けてく。それで英語とインドネシアだったらそれも少し入れて。

田中： ええ。

水野： 全部出来なくてもいいわけ。それはまた教えてくれるから。

田中： こちらのほうがわからないっていうと、教えてくれるんですね。

水野： かえって困った振りをするわけ。一生懸命やってるんだけどもという一生懸命という姿は見せないかんわけね。それを伝えるには、困ってるっていうとも見せないかん。

田中： ふふふ。情に訴えるところなんですね（笑）

水野： それはね、あるんだわ。

田中： いろいろやれないとダメなんですね。

水野： そうそうそう。そういうことをやって、20回目ぐらいからものすごい信頼が出てくるわけ。

田中： 積み重なってくるんですね。

水野： そうそう。いろんな国に20回くらい行って、ようやく認めてもらえてってことになるわけね。だからね、「マレーシア行ってくれよ」「はい、わかりました」って、ほとんどの人は物見遊山で行くの。

田中： あははは。観光だ。

水野： そう、「マレーシア初めてだけど、どこ行こうかなあ」って（笑） だから準備しないの。心配するのはね、「何持って行ったらいいかな？」って自分の持って行く服とか。そっちの心配（笑）

田中： ちょっと、違いますね（笑）

水野： 違うの、全然。私も気がついたから、部下に「向こうに行った時に何するの？」っていうのを会社の中で訓練するの。

田中： シミュレーションするんですね。

水野： シミュレーションする。それは一切メモを取っちゃダメという形でやるわけ。一切日本語も使わずに、「ボディランゲージでいいから」って。

田中： そういう訓練の期間を持つわけですね。

水野： うん。だいたい出張の1ヶ月ぐらい前に言われるケースがほとんどだから、普通だったら準備はできるけど、ほとんどの人は、『るるぶ』とか観光のところしか見ない（笑）

田中： あははは。行きたいレストランとか、問題外ですね（笑）

水野： うん。そんなとこ、行けないもん、まず。

..... つづく ^^

◆日本の常識がまったく通用しないのが海外

田中： むこうでは、結構、拘束されるんですか？

水野： あ、拘束される。海外は日本人の誘拐が多いから、絶対ひとりでは行動しちゃいかん。会社とホテルの往復も専用車というのが普通ですよ。で、休みの最初の1週間は慎重になって、どこにも出ないの。

田中： 出張期間はどれぐらいなんですか？

水野： 大体3週間ぐらい。1週間目の休みはホテルの近辺を周るぐらいで。2週間目になると大体要領がわかってくるから、出ていくわけよ（笑）

田中： 笑

水野： それでひどい目に遭った部下が何人もおりましたね。

田中： どんなひどい目に？

水野： あのね、特にマレーシアが多かったんだけど。クアラルンプールが首都で、とてもきれいな街なんだけど、あそこは中華系、マレー系、インド系って多民族なのね。

田中： うん。

水野： きれいなのは中華系なのよ。日本人と一緒にような顔をしてるの。で、そういう人が必ず流暢な日本語で話しかけてくる。私も引っかかって、クアラルンプール行った時に、ホテルから30分ぐらいの繁華街を歩いたら「お兄さん、ちょっとすみません」って言うわけ。

田中： お兄さん（笑）

水野： そう（笑） 「お兄さん、日本からですか？」、「そうです」、「日本のどこですか？」って、ついつい信用しちゃって「名古屋」、「名古屋ね、私知ってる」とか言うわけ。「その服どこで買いました？」、「栄で」、「栄、知ってます」っていうふうに相手のいう事を「よく知ってます」って言われると、信用しちゃうじゃん。

田中： ですね。

水野： そうこうしているうちに、「いろいろ話がしたいから、時間ありますか？」って言うわけ。「あ、これちょっとヤバいな」って、私は思ったんだけど。私の部下が同じような目に遭って……。彼は家まで着いてったの。

田中： あら。やばい。

水野： 家で最初お茶飲んでね、いろんな話をして。日本のこともよく知ってるんだって。で、家族でトランプやってたんだって。つまり、バカラ賭博だね。「あなた、知ってる？」、「いや、知らないよ」って言って、ゲームのやり方を教えてくれた。部下の方も、どうせ暇だから覚えていこうって。

田中： ええ。

水野： そうしたら勝てるようにしてくれるんだね。「あなた、上手ね」って。私、この部下の上司だったものだから、本人から具体的なことを全部聞いたわけです。

田中： ええ。

水野： そのバカラ賭博を教えてもらってから、5万、10万と勝たせてくれた。自分はやるもんだと思う時に、親戚だと名乗る男の人がまた入ってきたんだって。

田中： あらあ。手え込んでますね。

水野： うん。で、まだ勝たしてくれるんだって。勝ったり負けたり、勝ったり負けたり。

田中： シーソーゲーム。

水野： 最終的にその日は30万勝てた。その日土曜日だったから、帰り際に「勝った30万を倍にしませんか？」って。30万儲かったわけだしってこっちも迷う。

田中： うん。ま、いっかって。

水野： そう。いっかーって。で、50万負けちゃった。

田中： あらららら。

水野： そうすると、何も無いところから、プラス30万になり、そこからマイナス50万にな

っちゃったと。そんな現金持ってないけど、「カード持ってるでしょう」ってみんなに囲まれて、銀行に行かされて引き出して。そいつはそれでやめときゃよかったのに、次の日曜日にリベンジに行っちゃったわけよ。

田中： あー。

水野： 最終的に200万負けちゃったわけ。で、会社に戻ってその200万負けたことを現地会社のトップに話したわけ。「私は騙された。警察と一緒に行ってくれ。被害届出したい」って。だけどほんとは違法やから、会社も連れてけないじゃん。

田中： ですよ。

水野： で、「君の上司は誰だ?」、「水野さんです」と（笑）

田中： あはははは。

水野： で、日本に電話かかってきて、「すぐマレーシア来なさい」って、本部の社長から（笑）

田中： えらい目にあいましたね（笑）

水野： えらい目にあった（笑）

田中： その200万は、その社員さんの自腹ですか？

水野： そうそう、それで諦めさせたわけね。「盗られたことはしょうがない」と。で、「奥さんに内緒にしたい」って言うわけよ。

田中： うん。

水野： でも、「これは、わかるぞ」と。

田中： だって、キャッシュカード使ってるわけでもんね。隠しようがないですよ。

水野： 隠しようがない。「これ見つかったら離婚になるかもわからん」って、「そんなの、当たり前だわー」って（笑）

田中： あはははは。

水野： そういうことで結局、会社の方にも200万っていう訳にもいかないし、20万ということで会社に報告するぞと。家族にも20万と。後180万はなんとか自分で工面して、「奥さんにわからんようにしとけ」と。「俺、そこまでしかようやらん」って（笑）

田中： 温情ですね。

水野： そいつ、優秀な奴で、ちょっとイケメンだった（笑）

田中： まあー。カモにされちゃって（笑）

水野： そういうことがあってね。要は、『知ってる知ってる詐欺』が多い。それで安心感を持たせて、大体2週目ぐらいに、現地で仕事も慣れてきて生活リズムも大体出来てくると、「自分で回れるわ」って。

田中： 隙が出来るんですね。でも、生きて帰って来れてよかったですね。

水野： あ、そう！ また逆に200万出さなかったら、殺されとったかもしれん。

田中： 知り合いが外国行った際に、同じような感じで連れて行かれて、帰るに帰れなくなったって。

水野： やっぱそういうの、あるんだよ。

田中： 実際にむこうに行って、一番ためになるのって、そういう危ない目に遭ったっていう話じゃないですかね。

水野： そう。私、5年間で400人行かせた時に大体20%、80人の人間が何らかのトラブルあったよ。でもね、会社でそういうの言わないわけ。だから次に行くのに「あいつが失敗した」だの「こんなことがあった」って言わないわけ。

田中： それって、困りますよね？

水野： 私は部長やとったから、失敗談も全部出したわけ。

田中： 素晴らしい。

水野： その中にはね、女性にまつわる問題とかもあった。あと、日本人は盗難に遭うのが多い。どこの旅行会社のパンフレットに書いてあるんだけどさ、恥ずかしくてリュックサックを前に出来ない。むこうはみんなやってる。要は、恰好をかまっとっちゃいかんって話で。

田中： ええ。

水野： 後はパソコン盗られたり、カードをスキミングされたりはもの凄く多かったりした。特にタイで。

田中： 日本人って、4人掛けのテーブルに座った時、割に奥に座ると、通路側に荷物を置いちゃうじゃないですか。あの神経がわからないです。

水野： そうそう。日本人はついついね、カバンをポンッと置いちゃうんだよね。自分の身から離しちゃいかん。それもね、盗られてからようやくわかる。

田中： ふふふ。

水野： ホテルのセーフティボックスってさ、一番安心だと思うよね。

田中： はい。

水野： あれ、一番危ないから。

田中： え??

水野： あのね、ホテルのセーフティボックスは大体暗証番号4ケタにするじゃない。4ケタは、いとも簡単にわかっちゃうわけ。

田中： どうして?

水野： それはね、わざと汚くしてあるの。プッシュ番号のところに埃がかかっているわけ。で、押したら埃がとれるでしょ?

田中： え? それで?

水野： 後は4つの数字の組み合わせだけだから、簡単。それも大体若い番号から押すじゃない

。2・3・4・7とかさ。だから簡単。

田中： あー。

水野： だから、行ったら必ず、「セーフティボックスはタオルで拭け」と。

田中： 初めて知りましたー。

水野： パスポート盗られたり、現金、カード盗られたりする人も後を絶たなかったわけ。

田中： うん。

水野： で、「ホテルでちゃんと（セーフティボックス）に入れたの?」、「入れた」って。セーフティボックスは絶対そんなことないはずだからって思うじゃない。

田中： ですよ。

水野： そういうことがあって、ホテルの中のセーフティボックスに貴重品を入れたら、1回押した時に、必ず指紋がついてないかどうか拭いておけと。そしたら絶対わからないから、開けられない。その次に、セーフティボックスを一度動かすことも大事。あれ、そのまま外れるんだわね。

田中： えええ？

水野： 本来はボックス中から壁に固定させるためのボルトがあるんだけど、こちらから見ると壁についとるように見える。それに、まず、動かさないでしょ？

田中： うん。動かさない。

水野： だから、そのままゴソソと持ってちゃうことも（笑）

田中： やだ（笑）

水野： 開けられて、また戻してあるわけ。その数字がわからんとそれごと持って行く。そこにプロが待ってて開ける。その後は、また元に戻しとく。

田中： あー。

水野： 自分はあるものだと思うじゃない。

田中： 動かされたと事すら知らないし。

水野： あんなもん、動くもんだなんて思ってないし（笑）

田中： 盲点ですねー。なんかちょっと賢くなった感じがします（笑）

水野： そうでしょ？ だからそういうね、海外行った時にスリだとかは気をつけても、まったく安心だと思うところが、逆に危ない。だから、海外ではすべて否定で掛からないとき。

田中： なんか、疑り深くなりますね。

水野： そうそう。それでちょうどいいぐらい（笑）

田中： あははは。それをされてる方がおっしゃるから説得力があるんですよね（笑）

水野： あたりまえだと思ってるからね（笑）

田中： 盲点ですね。

水野： 盲点。後、プライバシーガラスがついてる車だからパソコン置いたりすることがあるんだけど、それが一番危なくてね。盗られるのは必ずそういう車から盗られてるわけ。

田中： あー。

水野： 要は油断しとるというふうに思うんだろうね。

田中： 置いてあるだろうという仮定で見てる。このガラスだから向こうは安全だと思っている。だから大事なものが置いてあるだろうと。

水野： そうそう。そうなの。だから常にレストランでも、どんなところでもパソコン持ってまわらんといかんし。会社のパソコンにはいろんな情報が入ってるから盗られるのが一番怖い。だから結びつけてでも。

田中： ええ。

水野： それに向こうの車は運転席から真っ黒だからね、そこから絶対見えないと思うじゃん。だから安全だと思っちゃうんだね。

田中： じゃあ、白くしといた方が逆に安全なくらいですか？

水野： 安全だよ。

田中： あー。日本の常識的な意識を、根本的に変えないといけない感じですね。

水野： そうそうそう。絶対なんかあるぞと。

田中： なんかあ、大変ですね。気が抜けないというか。

水野： 大変（笑） 気が抜けない。気が抜けない。常に「右、左、足元見ろ、上見ろ」だよ。中国はね、道路を歩いとっても、一番怖いのはマンホール。あれ、日本のようにカチッとハマってないんだよね。

田中： そうなんですか？

水野： あれ、穴の上に、ちょっと留めるところがあって、ただその上にのせてあるだけなんだよ。

田中： え？ じゃあガタガタする？

水野： いや……落ちる。

田中： やだー。

水野： 中国とか、タイもそうだな。マンホールで怪我する。

田中： マンホールには乗るなと？

水野： そう乗るな。マンホールの蓋を避けて歩けと。それでも4～5人怪我した。

田中： びっくり。

水野： 全治2ヶ月の怪我とか。途中で引っかかって足の骨を折って。

田中： 打ち所が悪いと、死にますよ……。

水野： 死ぬよ。それから、テレビ番組とかで、屋台で「おいしい、おいしい」とか言って食べとるけど、「屋台では絶対食べちゃいかんよ」とかもある。タイなんかは絶対ダメ。

田中： 危ないんですか？

水野： 危ない。つまり、水ね。何で洗っとるかなんだわ。だから海外の人は、カップにしても何でも一回は拭くわね。日本人は拭かない。マレーシアなんか全部熱湯消毒してからだし。やかんが来るんだわ。食べる時に。

田中： はい。

水野： 何をするのかと思ったら、それで食器を消毒する。

田中： で、そこによそって食べるんですか？

水野： そう。使うものは全部熱湯消毒。

田中： じゃあ、テレビのグルメ番組、とんでもないですね。

水野： とんでもない。

田中： やらせですね。

水野： やらせ。やらせ。

田中： やだあ。

水野： そこまでやらないと食中毒になる。それを見越して、「腹の薬も水を飲まなくても服用できるやつを持ってけ」と言うわけ。水がヤバいんだから、水飲んだらさらにヤバい（笑）

田中： ですね（笑） 日本は軟水ですけど、硬水だとお腹も下りやすいし。

水野： むこうは必ず水はバッグに入れること。水には注意しとるけど、ロックの氷でやられた

りはある（笑）

田中： あはははは。油断ならない。トラップだらけ（笑）

水野： 中国のミネラルウォーターで、軽く蓋が開くようなのはダメね。何が入っているかわからん。安いからって買っちゃダメ。だから常に慎重慎重にしないと、それが積み重なってね。でも、ちょっとした時に抜ける時がある……。

田中： ふふふ。先の友人も言ってました。「信頼関係が出来たとしても、最後の最後に裏切られることがある」って。

水野： そう、ある。裏切られるっていうのはね。それは私たちが行くとね、「ノウハウや、資料が欲しい」って言うわけね。

田中： はい。

水野： で、「これ、コピーしてみんなに配りなさい」って渡しても、配らない。

田中： ん？

水野： 彼らはその会社に対して、日本のようにずっと勤めるっていう愛社精神がないわけよ。自分を高く買ってくれるところに行く。特にマレーシアは転職制度を国が優遇しとるから、何回も転職した方が給料がアップしてくわけ。

田中： あー。

水野： 彼らが外に行った時に有利になるのが、例えば「トヨタの水野さんって部長が、こういうことを教えてくれた資料だ」と。私もいろいろサインもしたけど、それを「私は弟子だから」って、一緒に日本で撮った写真なんかは全部それに使われるわけ。

田中： へえ。

水野： で、「私は日本のトヨタで、そこまでやってきたんだから」って。だから、教えたら会社を辞めちゃうわけ。

田中： なんか、育てるの大変ですね。

水野： 大変だよ。だから向こうの人材育成は日本のような師匠と弟子の関係ではなくて。

田中： うん。

水野： 利用できる人は利用しようっていう、もの凄く割り切ったものだから、こっちが一生懸命育てようと思っても、それを裏切られる。

田中： うん。

水野： それは中国でもそう。海外はね。日本だけ、おかしい。

田中： それって、その中でどうやって育ててくんですか？

水野： それはね、やっぱり給料とポジションを約束しなきゃいけない。「3年後にはこうなる」、「5年後にはマネージャーにする」とか。いわゆる本人の育つ、その成長を我々としても「保証していくよ」ということを言わないと。

田中： ほー。

水野： 一生懸命やってくれたら3年後にアシスタントマネージャーにするとか。

田中： 形を見せないとダメ。

水野： 形を見せないと。自分のライフワークは彼らから見えないから。日本人だとさ、一生懸命働くところまでは年功で上がって行くケースが多いけど、向こうはそういうのいないから。

田中： ええ。

水野： 海外と日本の大きな差っていうのはね、日本は年功積んだだけ、いろんなポジションにつけるみたいなの。向こうは、例えば「課長が欲しい」というように、ポジションで人の入れ替わりが激しいっていうのをやってるわけ。募集するわけ。課長候補が欲しいとか。そうするとね、経験もないのに課長職に就くんだわ。

田中： へええ。

水野： そうすると、上の人は経験ないのに下の人は経験あるという図になる。

田中： うん。

水野： そうするとおもしろくないから、盗んででも上に上がりたいっていう気持ちになるわけね。給料も東南アジアで一般ワーカーなら、今インドネシアで1ヶ月1万5千円ぐらい。タイが3万円ぐらい。マレーシアも3万ぐらい。台湾が5万～8万ぐらい。

田中： ええ。

水野： 日本人の給料が、平均30万として、むこうなら30人の人が雇えるわけよ。だからあっちの視点で見れば、そういう人たちの持つとるものを得れば、自分たちもその値段で売れると思うわけよ。

田中： 錯覚するんですね。

水野： 錯覚するわけ。だから近寄ってきて、いろんなことを教えて欲しいと。

田中： うん。

水野： だけど肝心なところは教えない。見せるだけ。

田中： そこ、ものさし持ってないと、無理ですね。

水野： そうそうそう。それも経験しないと。例えば、「これ教えて下さい。資料ありませんか」と。それで我々が資料渡すと、ワーって凄く喜んでくれるから、役に立つとるなって思うけど、全然違うわけ。こちらは、してやったりと思っとる。

だからよく海外で裏切られたって言うのは、そういう国の状況っていうのかな。転職すれば自分が高く売れる……その時に何かの武器っていうのは、日本の会社の、ましてやトヨタの、何かの書類とか、何かの研修会修了書とかね。

田中： ええ。

水野： ばくも最初わからずに、渡してたわけよ。渡したやつ、みんな辞めちゃった。

田中： あー。

水野： それが顕著に出たのが、ロシアをやった時。

田中： ええ。

水野： ロシアから50人連れて来たの、三重工場に。で、3ヶ月間研修して修了書渡したわけ。

田中： はい。

水野： で、50人の内、1年も経たないうちに40人辞めちゃった。

田中： ええっ？ それ、ちょっと凄い。

水野： それでどこ行ったかっていうと、トヨタ工場の道路隔てた向こうにGMが新しく工場を建ててたわけ。そこ行っちゃった。給料をトヨタより2万円高く出すって言ったから、みんなそこに。で、トヨタでこういう研修受けてって言ったなら訓練期間なくていいわけ。

田中： ええ。

水野： それがね、えらい問題になっちゃってさ（笑）

田中： 愕然としますね。日本と常識が違うんですね。

水野： だからそれが通用するのは日本だけだってこと。それが一般、普通の常識なんだよ。日本だけがおかしんだよね。そういうことに、私は気がついて。

田中： あはははは。

水野： 日本で常識だと思ったことは全部違うということで対応しないとダメっていうことがわかった。

田中： 痛かったですね。

水野： そうそうそう。そういうこととかあってね。まあ、まわりまわって、トヨタもちょっと給料上げるよって言ったなら、それを聞きつけて、また20人ぐらい戻ってきた。

田中： それも平気なんですね。

水野： 関係ない、関係ない。マレーシアでも、何度も辞めたヤツが戻ってきたよ。「もう辞めるなよ」、「わかりません」って（笑）

田中： その度に給料上がるんだったら回った方がいいかなって感じなんですね。

水野： 真面目にコツコツやってる人は、上がらないわけよ。

田中： 高卒で入る人、大卒で入る人、院卒で入る人とお給料が違うのと同じような。

水野： そうそう。一緒一緒。同じ。そういうことがありましてね、いわゆる海外の常識っていうのは完全に日本では考えられないことが、向こうの常識なんだわ。

．．．．． つづく ^^

◆高級な日本料理よりカレーや回転寿司を喜ぶ

田中： 他になにか驚かれたことって、あるんですか？

水野： 他に驚いたことは、人の話でいけば、現地の人といかにコミュニケーションをとるか。

田中： うん。

水野： 日本人はすぐに日本料理屋に連れていくわけ。

田中： はい。

水野： 日本料理は、向こうでは凄く高いわけ。例えばね、きつねうどん。インドネシアとか食べると1杯700円くらいする。カップラーメンでも350円くらいする。

田中： 高い！

水野： でも、ぼくらは日本料理の店に連れて行きたがるわけ。向こうではすごい高嶺の花だから行ったことはないだろうと思うから。でも、それよりも日本食で有名なのは、COCO壺番屋のカレーだったりとか。

田中： へえ。

水野： あれ、タイとかでね、もの凄い高級食なんだわ。

田中： そうなんですか。

水野： COCO壺番屋のカレーは800円くらいする。日本と一緒に。

田中： あちらのお給料って、確か……。

水野： 日本の10分の1くらい。その中の800円だから、1万円のカレー食べるとのと同じ。

田中： コース料理並みですね。

水野： そうそう。それが食べたいって言うわけ。彼らはお膳にきちんとのった料理じゃなく、

C o C o 壺番屋のカレーが食べたいの（笑）

田中： ふふふ。

水野： それで、そういったところに連れて行くわけ。我々には安物だからね、800円かそこら
って思うわけよ。日本の感覚だからそうなるけど、現地にとっては10倍ぐらいの値段。だから
日本に来て、会社だと料理屋連れて行くんだけど、全然喜ばない。

田中： ココイチの方が。

水野： ココイチとか、くるくる寿司。

田中： は?? お寿司屋さん?

水野： 寿司屋でもくるくる寿司がいいの。特にいいのが、かっぱ寿司。何がいかと言うと、
回るとるレーン、それプラス新幹線で皿が来るという（笑）

田中： あー（笑）

水野： あれがまさに日本のテクノロジーだっていうことで。料亭連れて行って女将さんとか出
すよりも、新幹線で寿司が来たと。そういうポピュラーな食べ物に、彼らはもの凄い関心を持っ
てる。そういうのを食べさせてあげると、なんていうのかな.....もう一生の土産話みたいな。

田中： 大枚はたくよりも、そっちの方が。

水野： もう全然。大枚はたいって、ちっとも喜ばない。だって向こうは生食の刺身なんて食
べないでしょ。寿司でも、生でないものもあるし。

田中： ですね。それに新幹線だし（笑）

水野： 新幹線（笑） 写真バチバチ撮ってね。後、蔵寿司に行った時びっくりしてたね。「水
野さん、食べて、なんで皿捨てるんだ？」って。あそこは食べた皿を入れてくとカウントする
わけ。それを見て、大丈夫かってね。

田中： 食い逃げみたいに（笑）

水野： そう。「食い逃げ、ダメダメ」って。「違うよ。これカウントするんだよ」って言って

も信用しない。

田中： あちらにしてみると、マジックなんですね（笑）

水野： マジック。だから海外から親しい人が来て、凄く喜んでくれるのは、そういう食べ物。日本では当たり前で、子供が喜ぶようなものが結構喜ばれる。

田中： そうか。子供の視線になると、ヒットする感じなんですね。

水野： ヒットする。それにね、お酒飲めないんだわ、むこうは。イスラムはお酒は全部ダメだから。日本人だけビール飲んでね、向こうは何飲むかっていうと、スイカのジュース。

田中： スイカのジュース？

水野： うん。スイカのジュースに砂糖いっぱい入れて飲む。向こうの人たちは、アルコールはご法度だから。イスラムでも一番きついのが、マレーシア。インドネシアは少しゆるいわけ。だから、日本に来てインドネシアの人はビール飲む人いるけどね（笑）

田中： でも、お国としてはご法度で。

水野： 一番困ったのは、イスラムの国に行った時にビールを買うところがないんだわ。だからこっちもスイカのジュース飲まなくちゃ、いかんわけよ。甘ったるいんだわ。そうするとね、2週間ぐらいいると、4 kg ぐらい肥えちゃう（笑）

田中： そういう体調管理もしないといけませんね（笑）

水野： そういう経験、いろんな食べ物、風習ね。

田中： うん。

水野： そういうものは、旅の本には載ってないわけ。で、これもトラブルになったんだけど、出張する時に持って行く荷物ね。

田中： はい。

水野： 我々は現場で教えるために工具を持って行かせるんだけども、エックス線で映すと武器に見えるわけ。で、全部没収になったりね。それだと、仕事にならないじゃない。

田中： ええ。

水野： だから次に考えたのが、工具の説明が出来ないから、それを使ってる写真を持って行かせた。「これはこうやってものを削る道具なんだ」というように。

田中： ええ。

水野： 日本では考えられないけど、道具を影にして武器に見えたらやられちゃう。そうだと説明に困るから、必ず使ってる写真を撮っておこうって。

田中： うーん。対応策ですね。

水野： そう、対応策。それとかロストバゲージもあるからね。前、生もの入れたままロストバゲージされて一週間してから戻ってきたけどね（笑）

田中： おそろしいですね（笑）

水野： いろんな経験の中で、やっぱり一番困ったっていうのは.....最初の頃、ロストバゲージに遭って、英語で話しても相手は「わからん」っていうわけ。そしたら何をしゃべればいいんだと。

田中： 相手が納得してくれないと、通してくれないんですもんね。

水野： そうそう。向こうに聞かれることは、先にわからないもんだから。あれは困ったね。2時間、3時間かけて。

田中： なんとかクリアしたんですか？（笑）

水野： クリアした（笑） それから次はロストバゲージになった時に、「そうだ。日本人がしゃべる英語はわからないから、書いていこう」と。

田中： うん。うん。

水野： 発音が違うからさ、全然。だからロストバゲージになることを考えて、バッグの特徴、大きさ、カラー、付いてるタグとかを写真かメモにしていく。それを持たせるようにしてる。

田中：　なんか、子供の『初めてののおつかい』みたいですね。

水野：　そう！　そういうことがあって、今も毎月行ってるんだけど。やっぱり慎重になるね。今、特に中国が多いんですけど。また来週から行くんだけど、飛行場までは自分で行って、そこには必ず迎えが来てくれるからね。完全にひとりでタクシー乗ることは出来ないから。

田中：　やっぱり難しいんですね。

水野：　難しい。

田中：　この間テレビで、日本のラーメンを中国で売り出そうっていう企画をやってたんですけど。向こうでご商売をやってる方に案内役をやってもらって、空港で待ちあわせたんですけど、いきなりみんな走り出して「何で走ってるんですか？」、「バスが来たから」って。日本だと時間が決まってるんだけど、向こうっていつくるかわからないみたいで、来たバスに乗らないといけないって。

水野：　わかんない。来たらすぐ乗らないと出ちゃうしね。案内は、まず出ないし。でも、最近中国でよく新幹線乗るんだけど、あのシステムはいいなと思うことがある。

田中：　はい。

水野：　飛行機と同じように、チケットを買うのもパスポートがいるんですよ。

田中：　お。

水野：　駅に入るために買ってあるチケットとパスポートを一度照合して、ボディチェックもする。空港と一緒に。改札もいつでも入れると持ったら違うのね。10分前しか開かないの。

田中：　そういうセキュリティはしっかりしてるんですね。

水野：　そうそうそう。あ、この話も。私フィリピンには何回も行くんですけど。

田中：　ええ。

水野：　日本のイメージだと、フィリピンは汚くて怖いっていうのがあると思うんですけど。でも、よく考えてみたら一番安全だなんて。なぜかって言うとね、コンビニにも銀行にもお金が回る所には全部、自動小銃を持ったガードマンがいる。

田中： へえ。

水野： それを見ると、日本人は「怖い」って。でも逆に言えば、悪いやつは絶対に入れないということ。デパートでも、銃持ってて入口も全部セキュリティチェックして、女性用、男性用の入り口でボディチェックとカバンの中身も見せて。買う時には必ずレシート見せて。コストコみたいなもの。

田中： そこで照合するんですね。

水野： そうそう。だから悪い人は入れないから。銃を持つとるからといって怖いんじゃないくて、ガードしてると考えれば、かえって日本の方が危ない。どんな人が来るかわかんない。刃物持って暴れるってことはないから。

田中： ですね。

水野： インドネシアでも、軍隊がアルバイトでセキュリティやってるから。

田中： 以前イギリス行った時に、モスクワ経由で寄ったんですけど、あそこもみんな銃持っているんですよね。わわって（笑）

水野： そうそう。あれが普通だからね（笑）

田中： 考えてみれば、そういうことに対応出来るっていう事ですね。

水野： そういうこと。日本は丸裸だからやられるがまま。だから、どっちが安全かってよく考えるんですよね。

田中： ええ。

水野： まあ、騙すような人が、日本より多いていうのはあるけど、それは貧富の差だろうね。日本人見ると、給料は20倍～30倍もらってるし、日本人は絶対お金持ってるってイメージだから、何かいちゃもんつけられる。

田中： あー。

水野： 私の部下がロシアで警察に5千円盗られたことがあった。

田中： 警察に？

水野： うん。ホテルの近くにホームセンターみたいなところがあって、いつもみたいに買い物に行った帰りに警察官に呼び止められて。

田中： ええ。

水野： パスポートを見せたら、パトカーの中に放り込まれて「中に入れ」って。中に入ったら「5千円」と。それは日本語で言っただろう。

田中： カツアゲですか？

水野： カツアゲ。向こうはそういうの多いよ。

田中： ええー。

水野： だから我々は「命の代わりに出す5千円か1万円は常に持っとけ」と。ロシアは警察官だとか、中国でも警察官が、かえって危ない。インドネシアは入国の時にスタンプ押さない。「早くやれよ」って言うのに、日本語で「ゴセンエン」って。

田中： それは、スタンプ押すから「5千円出せ」ってことですか？

水野： で、1回払うとパスポートにマークされるんだよね。それでまたやられる。

田中： それ、空き巣がマークするのと同じみたい。

水野： そうそう。だから、その場合は絶対出しちゃいかん。時間かかっても「早くやれー！」って。

田中： 先の友人も言ってました。日本では割に温厚なんですけど、外国行ったら、「アグレッシブに大声出す」って（笑）

水野： そうそう。大声出すと向こうもスツとやる。

田中： やっぱり引いちゃいけないところが、あるんですね。

水野： あるある。

田中： 難しいですね。そこら辺を見極めないといけない。

水野： 度胸がつけば英語は結構しゃべれるんだわ。あのね、日本人が2人でいると英語はしゃべれないんです。私たちはいつもひとりだから、間違ってもいいでしょ。だからひとりの方が、英語話す訓練になる。文法なんか間違っと思ったっていいわけ。でも、部下がおるとき、「ちょっとかっこいいところ見せないかん」って（笑）

田中： まあ、上司としての威厳っていうのも（笑）

水野： で、しゃべれへん（笑）

田中： 上手くしゃべろうと思っちゃいかんですね。

水野： あかん、あかん。全然。全然。

田中： 通じりゃいいぐらいで。

水野： 通じりゃいい。ほとんど通じるよ。書けばいいし。書くっていてもスペルわからんけど（笑）

田中： あははは。そこなら電子辞書でいいですしね。

水野： そうそう。もう、日本ではないような経験を何十回とさせてもらったら、こりゃ本になるなって（笑）

田中： なりますねー。

水野： 仕事の話より、こういった話の方がね。

田中： さっきおっしゃったみたいに、度胸があれば英語が出来るってことは、その感覚で行けば現地での対応も、自ずと出来るようになるんじゃないですか。

水野： うん。かえてね、向こうが日本語勉強しとるわけ。よく知ってて、向こうにわからんと思って「馬鹿だなー」とか言うと、それは知ってるから信頼感がなくなる。だから「馬鹿とかアホとかは絶対言うな」とか書いとくわけ。日本語知らないから、何を言ってもいいってことじ

やない。

田中： ええ。

水野： 例えばね、仕事中に「今日早く帰って一杯飲み行くぞ。あそこのねえちゃんきれいだから」なんて、飲み屋の話とかすると、あっちはSNSがもの凄く発達しとるもんだから。すぐ知れ渡っちゃう。

田中： そうなんですか？

水野： 特にFBね。私も350人の内で200人ぐらい海外。向こうは仕事中でもFBやっているから。

田中： 離さないんですね。

水野： 離さない、離さない。

田中： それで、仕事は大丈夫なんですか？

水野： 「持ってくるな」って言っても、やっちゃう。だから、「やってもいいけど、昼休みだけな」というように。

田中： 本当、子供に言って聞かすみたいな感じですね。

水野： そうそうそう。だから、「向こうに行けば何とかなるだろう」というのは、最初はなんとかならないんだわ（笑）

田中： ふふふ。

水野： 向こうでは、子供に言って聞かせるような教え方をしなきゃいかんし、目の前でやってみせるってことが大事。

田中： 山本五十六（いそろく）さんみたいですね。

水野： うん（笑） 言って聞かせるよりもね。やって見せて、それで覚えさせる。でも、あんまり肝心なことを教えちゃうと辞められちゃう。その辺が難しいね。で、辞められないために、将来のライフワークを示してやるのと同時に、帰って来てからが勝負だね。

田中： 帰って来てから？

水野： 私たちが日本に帰って来てからのケア。現場ではいちいち電話とか出ないから。

田中： それはちゃんと繋がってるということを示さないといけないってことですか？

水野： うん。FBで「元気か？ あれからどうなってるんだ？」とか。「なんだったら、その写真を送ってこい」とかね。後は「G J G J、よくやった」とか。

田中： いいね、みたいなの。

水野： うんうん、いいね。そういうことで繋がっていかないと、「あの人は、帰ったらフォローしてくれない」、「だったら、別にやらなくていいや」となる。だからみんな出張だけ行って、本社のトップに報告すれば終わったと思うんだけど。現地では、「日本人が帰ったから、もうやらなくていいや」と。

田中： うん。

水野： 日本人は1回言えば残るけども、現地は残らないということ。いろいろ改善しても、捨てられちゃうんだよね。

田中： 忍耐強さも求められるわけですね。

水野： 求められる。だから海外で仕事やる時の前提として、要は、先方は30%しか理解していないと考えるんだわ。日本では「すぐやります」というと、すぐでしょ？ 向こうの「すぐやります」は、一週間だから。

田中： ぷ！

水野： まだある。「まあ、やりましょう」と言うのと、日本でなら一週間だとする。でも、むこうでは1ヶ月。ざっと3倍掛かるわけ。だから、「わかりました」を時間で見ると、3割3割で、実際には1/9しか出来ない。

田中： うーん。

水野： たとえば、「明日までに」あるいは「今週までに」って依頼して、相手の返事が「わか

りました」ならば、そこから始めたとしてもスピードと理解力は1 / 3だから。

田中： それは、例えばタイでもシンガポールとかでも一緒だったりするんですか？

水野： 一緒一緒。

田中： そこは共通してるんですか？

水野： そこは共通してる。

田中： 日本人だけが別なんですね。

水野： そう。俺もね、騙されたことあったんだけど（笑）相手に「わかったか？」って言ったら「うん、そう」って。日本で「うん、そう」って言ったら、「同意して、よく理解した」、「あなたの言ってることは、もの凄く理解したよ」って意味だわ。でもあっちの「うん。そう」は、ただの「はい」ぐらいの意味で、相槌を打っただけの話であって（笑）

田中： あはははは。

水野： 日本語で、そんなの覚えるわけよ。だからね、現地でレストランとかに行くと、「日本語教えて下さい」ってウエイトレスさんとかが来るわけよ。聞くと日本語習うのに月謝が3万円ぐらいかかる。で、本を見せてもらったら、誰が書いたのかわからんような変なテキストでさ。そこに「うん、そう」だとかが書いてあるわけ。

田中： 誰かが聞きかじった程度のものが、テキストに。

水野： そうそう。正確な日本語を習おうと思うとすごく高い。で、安く勉強すると、そういうローカルで中途半端な日本語を返してくる。そういうことが海外のおもしろさでもあって、扱うやり方がわかってきた。ようやく今、いろんな意味でね。

田中： ええ。

．．．．． つづく ^^

◆評価がBクラスやCクラスの間を部下として集めた理由

水野：だから最初の5年の内、2年間はやっぱり成果も上がらないし、扱い方もわからない。ほとんどの人は私がプレッシャーをかけて出張行かせても成果が出ないから、よけい鬱になったりして、やっぱり病気になった人も結構いたの。自分の言うことが伝わらないって。

田中：日本人って、結構失敗とか、『仕事の成果＝自分』というか、同一化してませんか？

水野：そうそうそう。

田中：切り離すが下手ですよ。

水野：下手下手下手。たまたまいっこのその場面でうまくいかなかったってね、大丈夫なんだけどね。やっぱり、真面目に考える人は。日本で優秀な人ほど、逆にあかんの。

田中：私、今中学校とか、高校とか行かせていただくんですけど、失敗することが怖いみたいなんですよ。

水野：そうだね。

田中：いわゆるエリート校に入学する。そこは各学校の頭のいい子が集まってくるわけで、どうしてもそこに優劣は出るわけなんですけど、中学で1～2番取ってた子がそこで40番だったりすると、すごいショックを受けちゃう。それをフォローするのが大変だという事を、その校長先生がおっしゃってました。

水野：狭い地域では一番だけでも、「もっと世の中にはいい連中がおるよ」ということがわかってないからさ。

田中：わかってないんですね。その校長先生に「そういう時、どうするんですか？」ってお聞きしたら「君は愛知県の40番だよ」って（笑）

水野：なるほど。愛知県で40番だけど刈谷で一番、みたいなね（笑）それはいいよね。

田中：ちょっと視点を変えてあげるってことが大事だよっておっしゃってて。

水野：そうだね。我々は一方向からしか見てないけども、反対方向から見たら。よくあるのはね、「あいつは何をやらせてもいいや」っていうやつと「あいつは何をやらせてもダメだ」っ

ているでしょ？

田中： ええ。

水野： ぼく部長の時、かえってそういうやつを集めたのよ。ダメなやつを。会社でダメだっというやつを。

田中： 冒険家ですね（笑）

水野： 集めたらね、かえってその方がいい仕事する。それはね、やっぱり土俵に上げてみると、本当に良いか悪いかわかんないわけ。実際に土俵に上げないままで、評判だけで判断したらね。いいものを持つとるのに、表し方が下手なだけで、「よく出来るって言われとるやつよりも、いいもん持つとるかも知れん」って思ってます。

田中： 素晴らしいです。

水野： 会社の評価制度では、S・A・B・C・Dの5段階の評価があるわけだけど、私が部下に選ぶのもBクラスかCクラスのを選ぶわけ。

田中： うん。

水野： 話したり面接したりして、あんまり成績は良くないけど何か違うなっていう人を選ぶ。そういうのに海外行かすと、全然違う。Sは全然ダメだけどBは出来る。今までのひとつの評価だけでは、人間の能力はわからないままで、それがわかるような機会を与えんといかん。

田中： うんうん。

水野： だから私のところには、それプラスね、スポーツ選手を集めたの。

田中： へええ。

水野： しかも全国レベルのヤツ。そりゃ仕事は出来ないけど、でも、それはやってないだけなんだよ。だけど彼らはやれるんだよ。周りから「いらない」って言われて「じゃ、俺のところに来い」って、私のところに集めて。掃き溜めみたいな職場もいいなって（笑）

田中： あはははは。これ、聞いた話なんですけど、チームビルディングで。

水野： うん。

田中： 8 : 2の法則ってありますよね。2 : 4 : 4だったかな。2割頑張って、4割が流動的で、残り2割はやらない、みたいな。

水野： そうそう。

田中： だから成果が出て、また新しいプロジェクトを立ち上げる時は、上の2割を異動させた方がいいっていう。そうすると、残った4 : 4の中から新しい2割が出てくると。

水野： そうそう。会社の中ではね。S・Aをなかなか出さない。その職場は出したがらないわけ。S・Aばかり残って一番困るのは成績つける時。低い人ばかりだとつけやすい（笑）

田中： ふふふ。

水野： 職場が硬直化するっていうのは、SクラスやAクラスのいわゆるイエスマンが残った時。評価だけで集めたチームは上手く成果が出ない。かえってダメ男君グループの方が思い切った仕事がやらせられる。

田中： 結局、やらなくちゃいけないと思うと、その中で役割をそれぞれが作ってくわけですよ。

水野： そう。そんな感じ。

田中： だから2割の人が固定されてしまうと、そこから硬直化してしまうと。

水野： そうそうそう。特に日本じゃなくて海外の仕事をやらせた時には、そういうグループ組んだ方が正解。

田中： うーん。わかる気がします。

水野： 一方向だけのいい成績では、こういうグローバルな仕事をやろうと思った時は、やっぱりダメ。行かせる前に事前準備、頭のいい奴ほど無手勝流で（笑）

田中： 結構、慣れたやり方しかやらないですしね。今までやってきて成果が出たやり方が通用すると思っちゃうんですね。

水野： そうそう。やっぱり苦労して失敗して積み重ねてる方がいいね。

田中： その方がいろんなケースを考えますよね。先程のお話みたいに、没収されたら困るから工具の写真撮って……とか、なんとか方法考えますし。

水野： そうそう。

田中： あたりまえだと思っちゃうと。セーフティボックスも外せるなんて、思いもしませんもんね（笑）

水野： 「一回動かしてみろ」なんてね（笑） 経験上10回に1回はあるね。

田中：ほんと、生きた教訓と言うか。

水野： そうそうそう。誰も教えてくれない。

田中： 本で見るだけだと、そういうこともあるのねって凄く他人事な感じになんですけど。

水野： 講習会とかで、やるとみんな頭に残るって。

田中： リアルですもん。

水野： 実際やってきたからね。

田中： 研修とかでもそうなんですけど、話だけだとわかんないんですよ。やり方として「こういうのがあるんですよ」と言ったとしても、自分と切り離して考えてる。

水野： そうそう。「あの人はああ言ってるけど関係ないわ」って。

田中： そうなんです。「だから実際に今やるとしたらどうするんですか？」って、そこに繋げることが、凄く大事だと思っています。そこまで言って初めて自分に繋げて考えてくれるんですよ。

水野： セーフティボックスは1回動かしてみろっていうのも（笑）

.....つづく ^^

◆初めての海外出張で体験した2つの絶体絶命の出来事

田中： あははは。水野さんご自身が今までのご経験で、「すっごい困ったー！」っていうものはありますか？

水野： 一番困ったのは、ロストバゲージの時だったなあ。生もので、相手のお客さんに渡すものが入りつつあったの。向こうからリクエスト受けてね。「ウニ、いくら、みたいなのを持ってきてくれ」だとか。あと日本の卵とか。向こうの卵は食べられないからね。東南アジアは絶対食べないし、海外で生卵が一番高級だから。

田中： そうなんですか？

水野： 一番喜ばれる。「生卵食べたことないから持ってきてくれ」と。

田中： そんなの、初めて聞きました！

水野： ほんと！？ だって鳥インフルだとかいろいろあるから、向こうは絶対食べない。日本だけだよ。ご飯に卵かけるなんて。

田中： 卵かけごはん。

水野： 今そういう店、向こうで出来たみたい。日本の卵でね。で、その「卵を持ってきて来てくれ」って。やっぱり商社とかは、そういうものをお客さんに持って行くと一番喜ばれるから。

田中： 普通に売ってるパックの卵とか？

水野： そういうのを全部壊れないようにパックして。次の日に大事な人に会わないかんかったのに。

田中： それが、出してもらえなかったんですね。

水野： うん。なかったわけよ。私の着替えから、仕事の段取りから全部入ってたスーツケースだったから、ほんとに何にもなしだった。

田中： わー。で、どうしたんですか？

水野： それでえ、とりあえず仕事はなんとか。着替えもないけど、買えばいいやと。でも結局

お土産が渡せない。

田中： お土産大事ですよ。

水野： 大事。向こうはそれ待ってる。「いや、ロストになりましたね」、「え？」って。それが南国の40度もあるようなところだから、一週間したら全部腐った（笑）

田中： あはははは。ロストなんだけど、先方に見てみたら本当にロストかどうか分からない。信用問題にも関わりますよね。

水野： そう！ そう！

田中： アテにしてたのに……みたいな、ね。心証悪くなっちゃう。

水野： それで気まずくなったりね。まあ、あの時一番困ったね。普通の時なら「ごめんねー」で済むけど、一番大事な話の時だったからね。後、現地で、私、迎えの車を間違えて、違う車に乗ったことがあってね。

田中： 怖い。

水野： 台湾で。「空港でこの人が待ってるから」と写真を送ってきたわけ。台湾から日本に。「Aさんという人が空港で待っているから、必ずこの人の車に乗って会社に来て下さい」って言われて。で、写真持って行ったんだけど、みんな同じような顔に見えちゃうんだよ。

田中： あー。

水野： 向こうが『水野さん』って紙に書いてくれていればいいんだけど、持ってないし、ずっと待ってるわけ。写真だけもらったって、誰だかわからない。連絡もつかない。で、私が「おーい」って言ったら、さっと手を挙げた人がいたから、この人だと思ってその車に乗った。しゃべるのもあんまり出来ないもので、そのまま乗ってたけど、地図みたら、どうも会社の地図と違う。町の方のはずなのに、どうも山に向かっている。で、おかしいなあって。

田中： で、どうしたんですか？

水野： それで一回会社に電話したの。そしたら「みんな探してる」というわけ。

田中： ああー。大騒ぎじゃないですか？

水野： 大騒ぎになっとる。で、「その車のナンバーを教えなさい」って。その運転手のナンバーを警察に言ってもらって、運転手に電話を代わって、「あなたの車のナンバーを警察に伝えたから、乗ってるお客さんをここに連れて来てくれ」って。それが一回で、もうひとつはね。

これはもうだめだって思ったのはね。台湾の台北で仕事やっとして、高雄の会社に車で、現地の人と一緒に行ってそこのホテルに泊まって、次の日に慌てて帰ることになった。で、ホテルのフロントにカードとパスポートを預けたまま、気がつかずに台北まで戻ってきちゃった。台湾と高雄は400キロ離れとる。明日帰らんといかん。

田中： わー。

水野： もう真っ青になって。あの時初めて真っ青になった（笑）

田中： ふふふ。

水野： 当然あるもんだと思ってるから。「明日のチケットの確認する」って言われて初めて気がついた。あの頃は前もって空港に電話しないといけなくてね。「電話するからパスポート貸してください」って言われて。「あー、ホテルに忘れてきたー！」って。

田中： 400キロ離れてるし。で、どうしたんですか？

水野： もー、足はガクガク。頭の中真っ白になったね。その時に助けてくれたのが、一緒に行った人の友だち。友だちが高雄で社長やっとして、その人に話してやるからと。彼が今晚中に飛行機で持ってきてくれるっちゅうわけ。

田中： あらら。パスポート届けてくれる？

水野： おー。で、「水野さん、そんなに心配するな。必ず明日の朝にはあんたに渡せるようにするから。今日は大丈夫だと思って寝なさい」って。

田中： でも、寝れないー。

水野： 寝れえへんじゃん。次の日ね、「水野さん、来たよー」って。もうウワーって。その台湾で最初、車を間違えて乗った。出張の間にパスポート忘れた。それが最初の海外出張の時に大きいことが2つあったわけよ。

田中： それは、凄いなあ（笑）　なんかトラウマになりそうじゃないですか。

水野：　トラウマになりそうだった（笑）　その時、台湾の人たちが持ってきてくれて、凄い恩人だと思って。その人たちが北海道に観光に来るといので、私も行ってね。案内は出来ないけどね、一緒にいろんなところ回ってお礼を言って。

田中：　凄い体験ですね。

水野：　もう参ったね。「なんでそんなトラブルばっか起こすんだ」って（笑）　もうイヤだったという時があった。でもそれからしばらくは海外出張なかったから。

田中：　よかったですねー。

水野：　で、今度はいきなりこんなに何回も、海外に行けてポジションに移っちゃったものだから。その時の経験があって、いろんなことに備えなきゃいけない。

田中：　身を持って体験なさったと（笑）

水野：　ホテルのフロントに預けるのはいいんだけど、必ず忘れるという。部屋はしっかりとみるんだわ。でも預けたということを忘れちゃう。

田中：　昔ながらに身につけてくということが大切なんですね。さっきの命からがら逃げたって知人は、捕まった時、逃げられないように金目のものは全部盗られちゃって。でも、靴にお金を隠してたそうです。

水野：　正解正解。靴下とかね。だから海外行った時は財布を持たない。裸銭で5千円くらいを現地のお金で入れておく。俺はこれだけしかないんだって。で、さっきのお金も靴とかに入れておく。

田中：　うん。それがなかったら、そこからタクシーをつかまえて、逃げるにも逃げられなかったって。「話には聞いてたけど、ほんとに役に立った」みたいなこと言ってました。

水野：　そうそう。そういうことがちらりとでも頭に残っていれば、「万が一にももの事を考えているか」ってことでしょ。聞いてないとき、考えもつかない。日本と同じように考えとる。日本人が海外でトラブル起こすっていうのがわかるような気がするの、みんな日本と同じようなつもりでいるから。

田中： うん。

水野： 旅行会社がいくら注意してくれても「大丈夫、大丈夫」って。

田中： 甘いですよ。

水野： 甘い。そういうことがね、いろいろ経験して海外でトラブルに巻き込まれないために、どうやってやるかっていう話を、いろんな人にしてあげる。7月に講演したら、えらい喜ばれてね。そこの社長が、「出張ばかり行く割には成果が上がらん」と。「行っても教え方がわからん」と。

田中： 相手に伝わらないと成果って、出ないですもんね。

水野： そうそう。日本で立派なことしてたって、海外じゃゼロスタートだからね。日本でどんな成果上げた人だって、向こうではわからないだからさ。向こうと同じ対等の目線でしゃべって、信頼を得る。一步違うなって。ラジオ体操ひとつでもピシってやる。「これちょっと直して下さい」って言われて、パパッとやれる。そういう人が一番に活躍できる。

何が得意なんだと言われたら、すぐに見せられるようにしときなさいと。いろんな資料よりも、一回見せたら、相手は師匠や先生って思っちゃうからね。ずっとついてくるよと。

田中： うん。

水野： けども辞められないためには、常にケアをする必要もあると。私のところにも、だいぶ辞めたいって相談がFBであるの。それはね、「日本のトップマネージャーが私の成績を悪くつける」とかさ、「今まで苦労したことを認めてくれない」とか、日本と同じようなことがあるわけ。

田中： はい。

水野： そういう時にね、「残ってがんばれ」って言うのと、「思い切って転職しろ」って言うのが半々。

田中： そこんところは見極める必要があるんですね。

水野： そう。上が評価悪くつけてたら、後なかなか上がらないから。これは日本の会社と同じなんだけど、そういった場合は、「おまえはスキルあるから転職しろ」とかね。結構ね、日系

会社っていうと、日本の大学出てる人が多い。日本語ペラペラだし、インドネシア、マレーシアは日本の大学留学の援助が相当あってね、その代りに自分の国に戻って2年間、国のいろんな経済政策で雇いたいといわれないうんわり、「その会社にいなさい」ってね。そういう人なんか通訳になってくれると、すごく日本人の心がわかるから。

田中： ええ。

水野： 通訳によって伝わり方が、もの凄く違う。ただ言葉だけ知るとる通訳では日本の仕事は出来ない。

田中： 知り合いの方で、外国の仕事先のお世話を頼まれて、「通訳にどういう人を選んだらいいのか？」って、友人に相談があった際に、「仕事の契約内容についての通訳と、日常の通訳と2種類あるからね」と。

水野： そうそうそう。ビジネスは駆け引きがある。特に中国でも、今私についてくれてる通訳の人が、日本の大学を出た人ばかりで「水野さん、国と国との間には、いろいろ問題あるけども、我々ビジネスの世界では関係ないから、思い切ってやってくださいよ」って。「あなたの言いたいことは私がキチッと伝えるから」と。で、こちらが言ったことを、復唱してくれる。

田中： いいですね。

水野： 今こういう状況だから、中国に関しては悪い報道しかしないけどね。そういうことの中で、いざ中に入ってみると、ウェルカムのところも十分多い。PM2.5もいろいろ言われるけど、あれも一週間に1回ぐらい。それ以外は青空。だけどこっちの報道ではね。

田中： 報道もテレビも、撮る人の主観が入ってくるでしょうしね。

水野： そういうこと。今でもいろんなおもしろい経験させてもらってるから、非常に楽しいです。

田中： ほんとにおもしろかったです（笑）

水野： お役に立てたかどうかわかりませんが。

田中： いえ。すごく楽しかったです。ありがとうございました！ あの、後もう少しよろしいですか？

水野： うんうん（笑）

..... つづく ^^

こちら、好奇心でかきだした質問表です^^

水野さんにもインタビュー後、おつきあいいただきました。

まずはどうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

<いろいろ質問表>

- ・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
- ・好きな本を一冊選んでください
- ・いつも必ずする「習慣」はありますか
- ・ねこ派ですか？いぬ派ですか
- ・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
- ・それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか
- ・それをどうやって乗り越えたんですか
- ・その時、大切にしていたことは何ですか
- ・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
- ・その人は、何か言っていますか
- ・3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
- ・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
- ・人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあったら、何ですか
- ・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
- ・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
- ・それはどんな冒険になるのでしょうか
- ・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか
- ・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
- ・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
- ・どんな時にイラッとしますか
- ・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
- ・何をしている時が一番たのしいと感じますか
- ・今一番欲しいものは何ですか
- ・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
- ・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい
- ・そこで何に気付きましたか
- ・今の自分を突き動かしているものは、何だと思えますか
- ・今死んでも悔いはありませんか
- ・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

- ・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
- ・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
- ・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
- ・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
- ・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
- ・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
- ・自分のキャラを一言でいうなら
- ・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
- ・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
- ・一年後、どんな自分にいるでしょうか
- ・最後に何か一言お願いします ^^

..... つ

づきは水野さんのおこたえデス ^^

田中： 月並みですが、小さい頃はどんな子供でしたか。

水野： あ、やんちゃですね。やんちゃ、腕白。

田中： 体育系ですか？（笑）

水野： 体育会系ですね。勉強よりも体育。

田中： じゃ、まさに海外行って、身を持って体験するタイプでらっしゃるんですね（笑）
好きな本を一冊選んでください。

水野： これ一冊っていうのはないですね。どちらかという、小説を読むより、モノ情報の雑誌を見るのが好きだから。

田中： まさに、ものづくり……ですね。

水野： おー（笑） モノマニアみたいなね、ああいう雑誌みるの。活字が嫌いだから。

田中： 絵的に見えるものがお好きなんですね（笑）

水野： 資料でもね、私の資料は活字が少ないんですよ。それと見出しをよく勉強したんですよ。キャッチコピー。あれが大好きで。会社の時によくキャッチコピーで資料作ってたんです。

田中： あははは。
3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか。

水野： 3つ願いが叶うとしたら、ひとつは世界一周を。ほんとに未開発の国っていうのかな。途上国、ここを全部回ってみたいな。

田中： おもしろいですね。世界遺産とかではなくて未開の国を。

水野： そう。私、雑踏の町とか好きなの。例えばインドネシア、マレーシアみたいなのところでも、汚い町が好きなの。

田中： それはどうしてですか？

水野： 自分が小さい時の、昭和30年代ぐらいの風景が。

田中： ああ、似てる？

水野： 似てるでしょ？

田中： 懐かしさを感じるような？

水野： そうそうそう。車もリヤカーだとか、道も舗装されてなくて土埃が立つような。そういうところが、またちょっと見たいなと。

田中： それは、郷愁みたいなの？

水野： そうそう。郷愁だね。それから常には、「日本においてよかったな」という、なんというか、自己満足？

田中： あははは。病院に行って健康でよかった、みたいなの？

水野： あー、そうだね（笑） もうひとつはね、85歳までは生きたい。だから後20年の中だね。20年の中でやり残したことを、やりたい。

田中： どんなことですか？

水野： あのね、私まだ日本一周してない。

田中： 外国は80回行ったけど（笑）

水野： 日本はまだ（笑） 車では何回か周ったんだけど、行ってないところが結構ある。そのどちらかというところ、2つの願いだね。85歳まで車で回りたいていというのと、もうひとつは海外の開けてない国へ行きたいなということ。3つ目はないなあ、今んところ。

田中： おもしろいですね。ひょっとしたら未開の地が開かれていくというところも見たいのかなって、気がするんですね。

水野： そうそうそう。だから、毎年行ってるもんだから。例えばインドネシアでもね、経済成長が凄いのが肌でわかるんだわ。車が年々新しくなってる、きれいになってる。10年前に行った時はガタガタの道だったのが、少しずつ舗装されて。今度は車がトラックから乗用車に変わって来た。乗用車も新しいモデルが多くなってきた。実感するね。

田中： まるで4丁目の夕日みたい（笑）

水野： そう！ あれあれ。あんな感じ。

田中： それをリアルに見てるんですね。だから同じところの景色を見るのが一番好き。どう変わって来たか。高度成長期って子供が一年経つと歩くような大きな変化があって。三種の神器が普及し始めたりとか……そういう時代ですね。

水野： 我々で言うなら、カラーテレビが街頭にしかなくて。家にカラーテレビが来るときは学校休んでって……（笑）

田中： 事件ですよ（笑）

水野： それをちょうど今、海外がやってる感じ。テレビに布掛けてるよ、海外行くと（笑）

田中： 工場とか、そういったものが経済基盤を造って行くから、まさに働きかけが形として見える部分なのかなって思いますね。

水野： そうそう。そうですね。私達、物が無い時代だったから自分で作ったものだから、それが生きとるわけ。身近な材料で何かが作れるわけ。

田中： そうですね。

人と会う時、つきあう時、その人のどんなところを見えていますか。

水野： 考え方もあるんだけど、今まで生きてこられてね、いいところがあると思うんだわ。そのいいところを聞き出したってところが、一番見るところ。

田中： へえ。つまり、その人のどこがいいところなんだろうと？

水野： そうそう。絶対何かあるんだわ。それを探したいわけよ。それはしゃべってるうちに探してく。それは田中さんとしゃべって、切れのいい、すごくすっきりした感じの、仕事で言うスマートさ。それがああるわけ。でも、それはあんまり外には出さずに、もうひとつの奥ゆかしさみたいな中に、そのスマートさがチラチラ見えるわけ。

田中： えへへ。

水野： 普通、男はいいところをバツと見せようとするけども、田中さんの場合、なんとなくそれが奥にある感じがするんだわ。

田中： わー。ありがとうございます（笑）

水野： だからこういう仕事できるんだなって。

田中： いえー。ほんと好奇心だけで。今日の水野さんのお話、凄くおもしろかったです。

水野： 私は何でも知りたいの。この歳になっても、わからない言葉とかがあるとどんどん調べていく方で。つい夜中の12時ぐらいになっちゃう。わからないことが知りたい。

田中： それですね。とてもお若いのは。

水野： いや（笑） 趣味はもの凄く多いの。

..... つづく ^^

田中： どんな？

水野： 今ね、凝ってるのは、熱帯魚をね、家族で。自分ひとりの趣味は、オフロードでジープを乗りにインドネシア行ってジャングルを走ったりするのを年に1回。

田中： あははは。

水野： だから自分の車も変えて、ジープタイプのランドクルーザーにしたんだけどね。後、マリンスポーツが好き。フィリピンでボートセーリングをやったりね。スキューバやったり。なんかね、なんでも1回やってみたいじゃん、死ぬまでの間に（笑）

田中： 好奇心、旺盛ですねー（笑）

水野： 一度、死ぬかなって思ったことがあって（笑） ヘルメットをつけてね、海の中に潜って魚に餌やるっていうのがあったんだわ。

田中： はい。

水野： それをやった時にパニックになっちゃってね。水が入ってきて。

田中： あー。怖いですね。

水野： うん。あれは一瞬焦ったけども、「落ち着け！」ってやったら、ずっとその怖さはなくなっただけども。「どうしよ、どうしよ」ってなると余計パニックになる。だから、「大丈夫だ」って自分の口で言い聞かせて。そういったこともあるけど、一通りやりたいことやれて来たから。

田中： へえ。

水野： ある時に子供からね、「自分の好きなことばかり、やっとなっちゃうかん」、「家族と一緒になんかやろうよ」って。

田中： お子さんに諭されたんですか（笑）

水野： で、孫が「おじいちゃん、金魚あげようか」ってことで、最初は金魚3匹から。それがエスカレートして、今は水槽が十幾つあるかな。

田中： それはまた凄いですね。水槽だらけじゃないですか（笑）

水野： 水槽だらけ（笑） 私の部屋でも4つぐらいあるよ。それもいろんなカラフルな魚を入れて。

田中： アロワナとかもいるんですか？

水野： いや……そういうのはいない。ちっちゃいかわいいやつ。今日も今からペットショップに行っ、ちょっと見てこようかなって（笑）

田中： また水槽が増えちゃいますね（笑）

水野： ははは。花を作ったり、後、カメラ。カメラやったら自分で被写体が作りたいもんだから。自分で花を育ててぱちりと撮る。カメラも趣味になるとだんだんレンズを変えたり……。

田中： 凝り性ですね。

水野： そう、凝り性。で、すぐ飽きるんだわ。B型だから。

田中： あははは。でもきっと一定のレベルまでは絶対やられてると思います。

水野： そうそうそう。

田中： それって自転車と同じで、1回乗れたら維持できるから。

水野： そうそう。以前、私趣味はゴルフぐらいしかなかったのが、増えたのにはきっかけがあって。奥さんを5年前に亡くしたんですよ。病気でね。それからね、今からひとりで生きてくのに、無趣味だったら、楽しみがないなと。それで、どんな趣味にも顔を出そうと。

田中： へええ。

水野： だんだん、おもしろくて。おもしろくて。そのうちにFBやLINEとかも1回やってみようって。それでだんだんはまって（笑）

田中： ふふふふ。

水野： 最初は淋しさを紛らわせるためにやり始めたんだけど。最近じゃ、それがね、非常に

よかったなと思ってね。普通今の年齢だったら、神社仏閣巡るしかないじゃん。

田中：　すごくフットワーク軽そうですもん。

水野：　そうだね。なんでもやっちゃう方だからね。たぶん、奥さんいたら、こんなに多くの趣味やらしてもらえなかったと思う（笑）

田中：　ぷ。

水野：　まあ、今まで彼女にも十分幸せにしてあげたからいいわっていうのもあるし。

田中：　うん。大事だと思います。

水野：　それから料理も得意で。

田中：　すごいな。

水野：　孫にはキャラ弁作って。F Bにも写真載せてますけど、最近ピンセットの世界で。海苔とか（笑）　料理は家族に作って食べさせたり。それをやり始めると、今度はスーパーに買い物に行くのが好きになってくる。で、写真撮ってF Bに載せる。ずーと繋がってるから、忙しくって（笑）

田中：　ふふふ。

水野：　最近はね、娘にもからかわれるの（笑）　家庭用雑貨は、フランフランに凝ってて買いに行くの。

田中：　おしゃれ。

水野：　だから部屋は凄い。

田中：　ファンシー？

水野：　ファンシー（笑）　笑っちゃって、みんな友達連れてくるの（笑）　それが今の生きがいになってる。

田中：　となると、「攻め」と「守り」とすると、結構、攻めな感じですね。

水野： 攻めだね。1回やってみないとわからないという。やめとこうってことはないね。

..... つづく ^^

田中： 落ち込まれることはあるんですか？

水野： 全然ないです。あ、1回あったね。

田中： はい。

水野： 私が会社に入って、稲辺工場の組立部長をやった時に、一番悪い職場だったんですよ。会社の指標がワーストの職場だった。その時には、何をやっても上手く行かない。自分は部長になったばかりの時、自分では凄くやれると思っていた。だけど全然うまく行かない。その時は落ち込んだりして、初めて会社行きたくないと思ったね、その頃。

田中： へえ。

水野： 今はそんなこと思わない。早く会社行きたくてしょうがないところがある。

田中： その時、どうやって乗り越えられたんですか？

水野： あのねえ。その時奥さんから、「もう会社、辞めなさい」って言われたの。頭に禿も出ちゃって。「あなたの陽気なところが全然出なくて、家族も嫌だから、思い切って辞めたら？」って。「辞めてって言うけど、それからどうするんだ？」、「なんとかなるでしょう」と。ここまで言われたらということで「もう、いろんなことあったって、いいわ」って。それが一番落ち込んだことだね。何をやっても上手く行かない。会社生活40年の中で、あんなに落ち込んだことはなかったな。

田中： ええ。

水野： それはみんなから、あの職場を上げるだろうと見込まれて行って。自分でもがいたけど、出来ない。それを救ってくれたのが、会社の会長だったの。

田中： あー。

水野： ちょうどハイエースという車を作ってた。モデルチェンジで最初から作る時に上手く行かない。私も本社から叱責されて。「水野をダメだと言わない奴は、ダメな奴だ」と本社で言われたんだよ。

田中： それは、凄いですね。ある意味。

水野： うん。そこまで言われた。それが聞えてくるわけよね。そんな時にその当時社長だった会長が工場へ来てくれると。

田中： ええ。

水野： 当時、私には部下が1700人いた。「1700人もいてそんな成績しか出せない。申し訳ない」って、社長に土下座しようとしたら、社長は涙を流して「君だから、まだここまでで持ちこたえとる」と。今もあの光景が……。ほんと、あれが私を救ってくれた。

田中： なんか、涙でそう。

水野： 怒られるもんだと思っと思った。毎日上手く作れない。1700人、ロスコストばかりだわね。

田中： うん。

水野： 品質も悪いし。そういう時、会社に行きたくないって気持ちもあって。だけどそこで、簡単に辞めるわけにはいかないなって思って。なんとかしなきゃって思っと思った時に社長が来た。「君の他だったら、もっと悪くなるわ」って言われて、その一言で……。今があるんだろうね。でね、3年でね、トヨタグループのワーストワンからね、ほんとに一番になったの。3年間で（笑）

田中： う〜ん、凄いですねえ。

水野： 3年間で一番。その3年間は何をやったかっていうと。毎日3時間現場でひとりひとりに、ひとり10分ぐらいだけでも1700人に、「今一番やりにくい仕事はなんだ？ どうしたらええだろう？」っていうのを全部聞いた。3年間ね。それでだんだん良くなった。

田中： まさに、花を育てるのであれば水をやる……という作業ですね。

水野： そうそう。みんなが「部長、なんでそんな格好してるんだ」って。朝から作業服で。

田中： 役職のある方って、自分の机でふんぞり返ってるようなイメージあったりしますからね。

水野： そうそう。あれが逆に私の凄い財産になった。自信がついたっていうか。それが今までの生きてきた中で、挫けそうになって、逆にそれがバネになって。いい人に恵まれたこともあ

って、今の私がおるなって。そういうのを感じる。

田中： ええ。

水野： だから、『プロジェクトX』みたいだったね。

田中：ほんとですね。NHKに取材に来たって感じですね（笑）

水野： ははは。あったよ、私。『ガイアの夜明け』出たよ（笑）

田中：ほんとですかー。凄いな。

水野： 2009年の12月だったかな。私ともうひとり。技能伝承で、私の部下が人間国宝みたいな技術の匠っていうので。

田中： はい。

水野： それで取材に来て、TV東京が2週間ぐらい私の横にいて、朝礼するところからね（笑）

田中： ふふふ。ちょっと見たいですね。

水野： ふふふ。まあ、そういうこともありましたねえ。だから、逆境っていうのは確かにある。で、その時に救世主はいるということなんだわ。

田中： あー、わかるような気がします。

水野： 誰に対しても救世主は来る。それがきっかけで、もの凄く変わるよって。

田中： でもねえ、逆境っていうか、ガーディアンというか救世主はいるんですけど。それってほんとに、瀬戸際にならないと出てこないじゃないですか（笑）

水野： 出てこない。出てこない。

田中： だから、そこまで落ちる覚悟がないと、逆に巡り合えないと思うのですが。

水野： そう！ あれが途中で放り出しとったら会えないね。

田中： はい。会えないです。会えないです。投げ出さずに、そこで留まってたから、巡り会えたんですね。

水野： やっぱり見てくれてる人はいるんだなあって思ったよ。本社の役員から、水野はダメだという烙印を押されたけど、社長だけは違った（笑）

田中： 一番トップの方が、そう見て下さってるのであれば、それ以上の事はないですもんね。

水野： 今までの人生の中で、一番嬉しかったことだね。

田中： うーん。もう、いい話だなあ。
今死んでも悔いはありませんか。

水野： 最初言った3つはやりたいけど。今はほんとにいい人生だったし、悔いはない。自分の人生、ラッキーで幸せだった。職場にも仕事にも家庭にも、いいことばっかだったんで、悔いはない。

田中： うん。素晴らしい。
世界に向けて演説をしたら、何を一番伝えたいですか。

水野： なんか、難しいなあ（笑）

田中： ふふふ。

水野： そんな……そんな質問、あかんわー（笑） 答えようがないような質問だわ。もうちょっとほんわかしたのじゃないと（笑）

田中： でもちゃんと持ってらっしゃる感じがしますよ（笑） もしくは身近な方に何を伝えますかってことにも繋がるんじゃないかなって思うんです。

水野： うん……やっぱりね……叶わない夢はないと思うね。夢を持てば、絶対何かがある。

田中： さすが、ものづくり大学の教授ですね（笑）

水野： ははは。

..... つづく ^^

田中： 生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか。

水野： 男。

田中： もう即答ですね（笑） なんかそのまんまやんちゃな感じで行きそうですね。

水野： 今ね、そっくりな歌があるんですよ。吉幾三の『男ちゅうもんは』って曲で、去年11月に出た。その歌の歌詞に「少しはやんちゃな方がええ」というのがあるんですが、私も昔はそうだったんです。「少しは乱暴な方がええ」、「ごめんなさいと言えればいい」、「けんかするなら限度を知れ」、「その後互いに握手しろ」と。

田中： なんか、男同士（笑）

水野： 覚えちゃった、歌（笑） 今、小学校3年生の孫にも聴かせてる。「自分に厳しく人に優しく」ちょっとここだけは、「人に厳しいところあるな」って（笑）

田中： あははは。

世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、何を消し去りますか。

水野： やっぱり憎しみみたいなことで、今。シリアなんか見とると、そうだね。結局誰が悪いのかわかんけど、「憎め憎め」でしょ。

田中： 憎しみというものを、消し去りたい……？

水野： 消したい。地球はなんで出来とるのって言ったら、「愛と憎しみから出来とるんだ」って。それをね、なんで覚えたかって言うと、この間読んだ『おもしろい小学生の珍解答』という本で。おもしろいんだわー、それ（笑）

田中： 陰と陽ですよ。

水野： そう、陰と陽だもんね。陰と陽があるからね、世の中上手くバランスがとれると思うんだけどね。小さい憎しみ、大きい憎しみいろいろあるんだけどな。憎しみを持つ前に愛を持たなきゃ、やっぱりいかなのかな。だから、どんな人でもいいところあるし。何も悪くてこの世に生まれてきてないんだからさ。

田中： ええ。

水野： 上手くいくようにしたいなって思ってるね。

田中： 水野さんを拝見していると、性善説なんだなっていう感じがします。

水野： あっ！ そうだね！ うん、私ね、何でもね、苦境に立ってもね、普通は全部いい方にする。

田中： うん。

水野： その、いい方にするっていうのを、みんな取れないって。「そうじゃないだろ」って言うけど。わずか1%でもいいところがあったら、そっちの方向のがいい。

田中： そうですね。今、失敗と自分（他人）を同一化してるところがある気がしています。そこに何が必要かなって考えると、自分は大丈夫みたいな思いなんだろうと思います。別に根拠はなくていいんだけど、それがあると、瀬戸際になった時、切り離すことが出来ますもんね。

水野： うん。そうですね。

田中： 水野さんはそういう体験を積み重ねてらしたんだらうなって感じます。

水野： そうそう。やっぱり経験だね。人生65年、会社で40何年間か揉まれて。会社でも修羅場を経験できるようなポジションにおったもんだからこそ言える。平々凡々じゃないからね。

田中： でもいろんな人がいて、苦労して、それで捻じれる人もいるじゃないですか。

水野： あー、おるね。

田中： それが、水野さんはまみれてない感じがしますね。

水野： うん。うん。

田中： イヤなことがあっても。

水野： そう、偏屈になって。私の友達も、そういう奴がおってね。何でもいい方に捉えられないのよ。ひがんで見るのよ。そういう人生見とると可哀そうだなって思う。やっぱり暗いんだね。明るさがない。

田中： ええ。

水野： うん。やっぱり捻じれてないわー（笑） 苦労した割に（笑）

田中： そうそうそう。まみれてない（笑）

水野： まみれてない（笑）

田中： 今一番大切に思っている事（もの）って、何ですか。

水野： 普通の事なんだけど、家族のことと、ここまで自分をやってこられた知識なり、ノウハウみたいなものは、宝だと思ってる。今までの経験したこと自体がね。これは宝で、お金には替えられないもの。

田中： 確かに。

水野： よう考えてみたらね、この前ね「80回も海外に仕事で行って、1回30万だとして、2千400万も俺に使ったわけか、会社は」と。

田中： ふふふふ。

水野： リーマンショックまでは、全部ビジネスクラスだったしね。エコノミーには乗ったことがなかったのよ。

田中： あらま。

水野： あの金額入れとったら、3千万円はゆうにいとるなと（笑）

田中： 凄いですね。

水野： 会社はこんなにお金かけてくれたんだなって。今から自分で、3千万かけて行こうとは思わないもんね。

田中： 3千万の男ですね（笑）

水野： 3千万の男や（笑）

田中： おもしろい（笑）

今日のこの時間で、何か気付いたことはあったら教えてください。

水野： うーん。なかなかおもしろいインタビューだって思った。私も楽しかったんだけど。こういう人それぞれの生き方なり、そういうことを田中さんは今まで全部キャッチしてるものだから、ザーと並べたら、そりゃおもしろいだろうなと思った（笑）

田中： おもしろいですよ、ほんとに（笑）

水野： ね。おもしろいね（笑） こんな仕事があるんだなって。ただ聞き役だけじゃなくて、自分で書いてるんだからさ。それで、喜んでもらえてっていうようなことだったらって、今日感じました。で、見たら無料配布になっとるじゃん。

田中： そうなんです（笑）

水野： いや、どうやってビジネスやとるんかなと思って。よう無料で配布しとるなと思って。それが不思議だった。

田中： ふふふ。私の本業はコーチングとかセミナーなんです。

水野： そっちが本業！ なるほど！

田中： それで声かけてもらって、学校とか行ったり。

水野： あなた、車体にいなかった？

田中： え？ いないですよ（笑）

水野： 車体の人事か、企画室にいたような感じしたんだけど（笑）

田中： そんな（笑） 私、前職は歯科衛生士だったんです。

水野： あ、本当？ うーん。そうすか。

田中： はい。

水野： だからいろんな分野でセミナーあって。就活する人に対する心構えだとか、こう活きた

教材を上手く教えてやれば、道はひとつじゃないよと？

田中： そうなんです。大抵は、1か0だと思ってることが多いですね。だから、こうやってお話を伺って書き起してるのも、世の中にはいろんな大人がいて、いろんな働き方があって...
...というのがおもしろいというか、選択肢に繋がるんですよね。

水野： なるほどね！ だけど、今日は私も受けてみて、おもしろかった（笑）

田中： 私もとてもおもしろかったです。

水野： んふ。

田中： 今日は本当にありがとうございました！

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。

少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、

『コーチング』 という専門職の顔も持っています。

実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、

おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、

クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクール

でCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約550人のコーチがCPCCの資格を取得し、世界中では6,900人のコーチがこの資格を持って活躍しています。（2014年6月現在）

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学 『NLP（神経言語プログラム）』 も学び、

米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。

このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、

目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に

「本当に生き甲斐のある人生とは何か」 を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。

今なら1回60分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

< ace-support@samba.ocn.ne.jp >

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版

記者兼編集長 田中永子

ハタラクヒト*ペディア 17 < 水野忠男 氏 >

<http://p.booklog.jp/book/83962>

著者：田中永子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/24riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83962>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83962>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ